

## 6. 記憶の管理とカルチュレール —モレルとシャスタンの仕事をめぐって—

岡崎 敦

### はじめに

「記憶の管理」が歴史学の重要なキーワードとして浮上するなか、西欧中世史料論の領域において、カルチュレールと呼ばれる史料類型が注目を浴びたこととなった。この史料伝来の一形態は、真偽の判定とそのためオリジナル確定、さらには信頼できる史料集の刊行を本来の目標として掲げていた史料学者にとっては、信頼性が低い文書史料のコピーの集成でしかなかったが、いまや「記憶と歴史」をめぐる議論の不可欠の要素となったのである。このような発想の転換をうながし、研究史の上でも画期をなすのが、1991年にパリの古文書学校で開催された研究集会であるが、そこでは、カルチュレール作成の動機、諸条件、他の史料類型との関係、さらにはその「生命」（生成から利用を経て、忘却や破棄に至る）に関する諸問題のすべてが課題として提示された<sup>1</sup>。この際、とりわけ多くの関心を集めたのは、編纂事業をめぐる政治環境であり、とりわけ、編纂にあたっての文書情報の改竄に関する問題系であったが、とりわけ「記憶と忘却」をテーマとするギアリの書物は、この問題に一章をあてて本格的に検討するなど、大きな注目を集めた(GEARY [1994])。

しかしながら、カルチュレールをめぐる諸問題は、政治史や教会史とのかかわりに限定されるものではない<sup>2</sup>。ここでは、近年、フランス学界で注目すべき業績を発表し続けている二人の歴史家の仕事を紹介しながら、問題の地平を拓けることを企図している。

### 1. モレルのカルチュレール論

91年カルチュレール研究集会の仕掛け人の一人であったモレルは、12世紀以前の文書史料の諸問題について、多様な観点から研究を続けているが、カルチュレールについても、アーカイヴズ管理という実務上の性格を強調して、学界のなかでも独自の貢献を行っている

<sup>1</sup> 91年研究集会については、全貌を伝えるものではないが、GUYOTJEANNIN [1993]として内容を知ることができる。岡崎敦「フランスにおける中世古文書学の現在—カルチュレール研究集会に出席して—」（『史学雑誌』102-1、1993年、89-110頁）も参照。本稿では、主な業績を稿末にリストとしてまとめ、文献の参照は著者・編者名と出版年代によって示す。

<sup>2</sup> その後の研究状況については、以下の研究集会録および動向論文が最初の導き手となろう。KOSTO [2002]; PARISSE [1998]; BERTRAND [2006]。なかでも、2002年にベジエで開かれた南フランスのカルチュレールを対象とする研究集会（LE BLEVEC [2006]）、とりわけブランによる「総括」は（BOURIN, M., Conclusion, dans *ibid.*, pp.263-268）、現時点での主要な論点を明示するものとして重要である。他方、91年集会を準備した二人のシャルティストによる以下の学界動向は、「伝来と受容」の問題系は、「記憶の管理」に限られない射程を有していることを印象的に語っている（GUYOTJEANNIN/MORELLE [2007]）。そのほか、近年、カルチュレールを利用した文書史料集の新しい刊行が続々と現われており、稿末において、最近の代表的な文書史料集をまとめた。

る。ここでは、多くの業績のなかから、二つの仕事を紹介しよう。

一つは、前掲のギアリの著書批判として書かれた「紀元千年ごろの歴史とアーカイヴズ」と題する論文である(MORELLE [1998])。ギアリは、「心的」な変容と社会・政治的な変容との間には相関があり、紀元千年の変革に連動した史料上(=現実表象のあり方)の変革が存在したことを主張する。具体的には、「記憶の管理」に関して、いまや女性に置き換わった修道士による、「現在の必要に奉仕する過去」が構築されたことを説き、不必要な古い文書が破棄される一方、あるべき記憶・歴史が新たに創造されたという<sup>3</sup>。

これに対して、モレルは、おおよそ以下の4点にわたって批判を展開する。第一に、方法論上の問題として、ギアリの言う「紀元千年」が、諸例から判断するに、10世紀から11世紀一杯を包含しかねず、時代設定として無意味とする一方、「歴史叙述」の伝統を見れば、中世初期から11世紀末まで断絶はないという。他方で、ギアリはサン＝ドニの著名な偽文書作成を取り上げているが、この修道院の特殊性について十分な配慮がないばかりか、同時期の文書管理として、サン＝リキエやフルリの例は無視されている。

第二に、11世紀における過去の破壊に関して、まず「過去の手直し」自体は、いつどのような環境においても生じえることに注意を促したのち、カルチュレール編纂とオリジナル破壊との連動について、安易な想定を強く批判する。また、サン＝ドニにおいてすら、偽文書の作成は「過去の創造」ではなく、(実際には存在した文書の替わりとするための)「偽オリジナル」作成であった。

第三には、カルチュレールの編纂実践の「新しさ」の主張についてである。偽作を含む編集事業は、状況、材料、作者の個人的性向などに強く依存し、それらは、「意図」と同時に、文書庫の状態を反映していると考えべきである。したがって、文書数、形式、生産様態、生産の場など、多様(で些細)な要因を考慮に入れねばならないが、ギアリには、このような観点が抜け落ちている。

最後に、存在が推定される中世初期文書が多数伝来していないことについては、「過去の破壊」というよりも、書き物の価値との関係で再考すべきであるとする。そもそも、どのような意味で法行為・法的事実が文字化されていたかが、すでに問題であり、他方、紀元千年に先立って、多くの文書は破壊されていたことは確実である(日常の文書管理問題)。一般に、意図的な破壊は例外的であり、過去意識の変容が、文書の体系的操作や破壊を促したとする証拠はない。

以上のような批判を繰り返しながらも、モレルは、10-11世紀に多くの教会機関が、みずからのアイデンティティの再定義に直面したことを承認しており、この際、文書庫資源が利用されたことは間違いないとする。したがって、「変容」したとするなら、それは「過去の関係」ではなく、「アーカイヴズ(過去の貯蔵庫)との関係」なのである。

モレルのいま一つの仕事は、モンティエ＝ラン＝デル修道院カルチュレールの個別研究

<sup>3</sup> GEARY [1994] pp.81-114: «III. Archival Memory and the Destruction of the Past»

である(MORELLE [2000])<sup>4</sup>。現在オート＝マルヌ県文書館に保管されている、この修道院の最初のカルチュレールについての本格的な基礎研究であるが、ここで注目したいのは、彼が行っている作業の細部である。論文は、まずこのカルチュレールについての基礎情報の収集と整理、すなわち、近世以降、現在までの知られる限りでの、この史料についてすべての情報をまとめたあと、本論に入る。

「カルチュレール」と題された第 1 章では、この史料に対する基本的な検討が加えられる。まず、「写本の描写」として、古書冊学および古書体学的分析が行われ、冊子やカイエの構成と書記たち、さらには冊子が包含する多様な情報が整理される。続いて、「原初カルチュレール」部分の作成年代および状況の推定が行われる。

第 2 章は「カルチュレール作成者の作業」と題され、文書庫に残された史料（とりわけオリジナル）との比較による転写の選択、転写の性格、そして「読者への助け」（冊子参照のための便宜の開発）が検討される。文書庫との関係では、伝来する他の史料、とりわけオリジナル文書との比較検討が行われるが、とりわけ、オリジナル文書裏面記載が示す文書管理の痕跡が重要である。カルチュレールにおける文書の配列が文書庫の状態とどのような関係にあったのかが、大きな問題であるからである。結果として、修道院長治世を大枠とする年代順の堆積と、「一件書類」によるとりまとめの論理が、諸要素の配列に大きな意味を持ち、これは、文書庫の状態に規定されていたことが主張される。ついで、各文書の転写の質が、伝来するオリジナルおよび他のカルチュレールとの比較、さらには、当該カルチュレール自体の微細な検討から吟味される。結果として、内容よりもむしろ形式、とりわけ下署欄への注意が看取される。最後に、「読者への助け」としては、まず各文書冒頭に付されたリュブリックが、その有無、表現形式、オリジナル文書裏面記載との関係の諸面で検討の対象となる。とりわけ、文書の表現形式については、発給者、法行為、場所、諸権利等のどの要素に関心が向かっているのかなど、文書情報の認識と表現自体の類型と展開という面から、とりわけ重要な課題を提起している。他方、冊子に付加されたさまざまな装飾（イニシアルやリュブリックへの着色）もまた、文書の内容よりもむしろその体裁への配慮を強く示唆するものである。

最後の章では、当該修道院の文書との関係が総括的に議論される。多様なやり方で伝来する文書の総数や類型の時間的変化が検討されたのち、修道士たちの文書情報管理の様態が、さまざまな側面から議論される（歴史編纂、アーカイヴズと宝物庫、実務管理など）。本論は、最後に、偽文書とその生成状況について検討して終わる。

モレルの一連の仕事は、カルチュレール編纂を個々の状況に規定された実務作業とみなし、それぞれの史料現象個別の性格と、これをとりまく諸条件を特定することを目指すものであるが、いずれも、史料論研究は、文明論的な一般論からではなく、個別についての

<sup>4</sup> モレルのカルチュレールを素材とした研究は膨大な数にのぼるが、代表的な研究として以下のものがある。MORELLE [1993]; MORELLE [1997]; MORELLE [2000]; MORELLE [2006].

微細な分析から出発せねばならないことに注意を向けさせる。モレルにおいては、とりわけ、作業自体が一つの思考実験、知的冒険であり、同時に、数百年におよぶ実証主義の伝統的な美学の精髓を体現しているとさえいえよう。

## 2. シヤスタンのカルチュレール論

ソルボンヌの高等研究院指導教授という威信ある地位にあり、シャルティストの伝統を研究の前線で継承するモレルに対して、2000年にパリ第一大学において、モニック・ブランの指導下で博士号を授与されたシヤスタンは、まったく異なるタイプの研究者であろう。『読むこと、書くこと、写すこと —低地ラングドックにおけるカルチュレール編纂作業—』と題された彼の学位論文は、数少ないカルチュレールに関する本格的な個別研究であるとともに、「カルチュレールと記憶の管理」という問題系に関して、新たな研究の地平を開くものである(CHASTANG [2001])。しかしながら、彼が2006年に発表したカルチュレールについての研究動向論文は、最近の問題状況を包括的に論じるものであり、学位論文に先立って、まずこちらの紹介からはじめたい(CHASTANG [2006])。

近年刷新された紙面作りが印象的な『中世文明雑誌』に掲載されたシヤスタンの動向論文は、まず、テキストとは、書く行為と意図との結合が、モノと記号として現われたものであり、その存在と物的伝来自体が検討の課題であるとする。さらに、1980年代以降の歴史学研究の全般的状況にも触れ、大理論による解釈が忌避されるとともに、不均一な読解の対象としての史料に対する関心が高まってきたとする。この条件でのもとの、カルチュレールが特権的な研究対象として浮上してきたのである。

研究状況を振り返れば、1991年の研究集会の重要性は論を待たないが、さらに、その背景として、グネ学派の「歴史編纂の歴史」があり、他方では、カタロニアを対象としたジメルマンの孤高の努力があったことも見過ごせない。すなわち、社会・政治・文化の最良の観察台として、書く行為への関心が持続されていたのである。他方で、過去の記憶の管理という点では、ドイツ学界においては、「文字実践」が一世を風靡しており、文書に関して、これを単に法的・挙証能力という観点だけではなく、より広いテキスト環境のなかで議論することが求められるにいたったという<sup>5</sup>。

他方、90年代の中世史研究との関係では、「紀元千年の変革」論争との関係が重要である。この点では、バルテルミの一連の発言が、社会の変容と文字実践との関係について再検討を余儀なくさせた。彼の業績のなかでも、研究史の脱構築作業や、諸概念操作の危険性への警鐘、さらには史料研究 (*érudition*) と人類学的考察の連携は、とりわけ貴重であった<sup>6</sup>。他方、同時期、社会史研究全般においても、書く行為の意義を再考する仕事が多く現われ、

<sup>5</sup> グネ学派、ジメルマンおよび「文字実践」については、本報告書所収の、岡崎敦「西欧中世史料論の現在」を参照。

<sup>6</sup> バルテルミについても、同じく「西欧中世史料論の現在」を参照。

規範と行為、個人と集団、「構造」などの観点を導入しながら、社会システムを生産するヴェクトルとしての書き物（権力としての書き物）という論点へも関心が寄せられていた<sup>7</sup>。

さらに、90年代以降は、いわゆるテキスト理論が歴史学においても受容されはじめた。この際、アングロ＝サクソン学界（英米学界）の影響は大きく、克蘭チ（リテラシー）、グッディヤストック（書き物普及の社会・文化的諸結果）、ムーアやギアリ（記憶、書き物、新し分節化実践の誕生）が、フランス学界へも紹介された<sup>8</sup>。アルブヴァクスの社会的記憶論が再評価されたのもこの頃である<sup>9</sup>。

以上の状況を受けて、近年、カルチュレールに関して、以下のような諸問題が議論されているという。たとえば、モレルやデクレルクが取り組んでいるカルチュレールと文書庫との関係（文書管理の文脈での位置づけ、文書裏面情報と冊子の構成・分類など）、他の諸テキスト（聖人伝、奇蹟集、歴史ほか）との間テキスト性や文書の「著作化」（モレル）、偽作や改竄などの記憶の操作等である<sup>10</sup>。さらに、中世社会では、創造とはつねに過去の再定義というかたちをとったことから、過去意識自体が研究の課題ともなる（イオニャ＝ブラ、リーメンスナイダー、ギアリ）<sup>11</sup>。最後に、作成の実務にかかわる側面として、史料の配列（情報の整理や「世界観」の反映）や転写の質（単なる正確さではなく、「権威」構造）も重要な課題である。

シャスタンは、最後に、今後の課題として、受益者による文書史料の冊子への体系的な転写事業自体の生成、および制度化のロジックを挙げる。従来もっぱら研究の対象であった教会のみならず、都市、領主、君主のそれも含めて、カルチュレール編纂は、個々の歴史的・制度的・霊（心）的コンテクストに依存しているが、議論の体系化もまた必要な段階にあると認識されていると思われる。

他方、学位論文においては、古典的な関心を受け継ぎながらも、独自の観点からの考察が多数試みられている。

シャスタンは、まず、研究動向を整理しながら、カルチュレール編纂に働くさまざまな力を検討することを研究の課題として掲げ、11-13世紀の南フランスについて、合計13の

<sup>7</sup> ここで念頭におかれているのは、ブルデューの象徴権力論やウィッカム／フェントレスの『社会的記憶』である（WICKHAM, Ch. and FENTRESS, J., *Social Memory*, Oxford, 1992）。

<sup>8</sup> CLANCHY, M. T., *From Memory to Written Record, England 1066-1307*, Oxford/Cambridge, Mass., 1979, 2nd edition, 1993; GOODY, J., *La raison graphique. La domestication de la pensée sauvage*, Paris, 1978; STOCK, B., *The Implications of Literacy. Written Language and Models of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Princeton, 1983; MOORE, R. I., *The Formation of a Persecuting Society. Power and Deviance in Western Europe 950-1250*, Oxford/Cambridge, 1987; GEARY [1994].

<sup>9</sup> HALBWACFHS, M., *La mémoire collective*, Paris, 1950, rééd., 1997.

<sup>10</sup> モレルについては、前掲注3参照。DECLERCQ [1996]; DECLERCQ [2000]. デクレルクの論文が掲載されている二つの研究集会録には、他にも重要な論文が多数掲載されている。

<sup>11</sup> IOGNA-PRAT, D., *Ordonner et exclure. Cluny et la société chrétienne face à l'hérésie, au judaïsme et à l'islam*, Paris, 1998; REMENSNYDER, A. G., *Remembering Kings Past. Monastic Foundation Legends in Medieval Southern France*, Ithaca/London, 1995.

カルチュレールを具体的な研究対象として提示する。これらの比較検討によって、時期的変化のみならず、編纂主体ごとの相違と類型化も目指されているのである（司教座、修道院、俗人領主）。

「カルチュレールの発生」時期を取り扱う第1部では、11世紀後半に作成された修道院カルチュレールを対象に、編纂の諸条件とコンテキスト、作成段階と形式の分析が行われる。ここでは、修道院財産の保全や院長選挙、隣接する教会との紛争などの歴史的背景が述べられ、この時期のカルチュレールが、同時期のノティスと同様に、恒常的紛争構造のただ中にある11世紀の政治環境に由来することが確認される。この時期問題となっていたのは、なにより教会財産の防衛と再建であり、カルチュレールは、紛争を背景とする諸文書の集合体の観を呈している。興味深いのは、各文書の配列が、創建文書をはじめとする諸権威の集成に続く地理別分類においては、伯領・副伯領という（当時すでに失効していた）公的な系譜を引く領域単位によっており、さらに、修道院本院近くから周縁へと向かう地理的構成を取っている点である。恒常的紛争状況のなかで試みられた修道院領主権の領域的構築が、過去の公的諸権威と守護聖人の保護の観念に強く依存する一方、同時代の教会改革、さらには教皇の保護とも連動するという、「改革期」に特有な性格が見られるわけである。

これに対して、12世紀には、文字行為の洗練とローマ法の復興、さらには他の書き物との関係という新たな要素が確認される。まず同世紀初めの二つの修道院カルチュレールの比較から、両修道院の対立と、それぞれが戦略的に採用した文書管理作業があらわになる。さらに、この時期を特徴づけるのは、マイクロ件書類の繁茂であって、これは、紛争解決手続きが厳格化したことを反映する。文書の配列も、司教座ごと、一件書類ごとの配列に変わり、11世紀の理念的配置が放棄される。転写にあたっては、網羅性と正確さの追究が顕著で、資産の系譜をたどることが目標とされているように見える。文書形式自体が規格化され、その数も増えたことから、転写作業自体が格段に大きな事業とならざるをえないが、結果として、カルチュレールは、財産に関する情報を集中させる手段として、実務的な取り扱いをさらに濃くしたといえる。

他方、12世紀に生じた参事会改革の結果、南仏の司教座においては、自立した司教座参事会が形成されたが、たとえばニーム司教座参事会においては、11世紀以降の教皇文書や教会会議議決にのみ関心がむかい、古い文書への関心や、他の種類の文字文献との関係は希薄である。ここでは改革コンテキストや霊的理念も表面には感じられない。在地への執着が濃く、アイデンティティの根拠を創建の古さに求めがちな修道院とは異なって、司教座教会は、普遍教会の一部であるとの意識が強く、「参事会員には、過去がない」と表現される。さらに重要なのは、司教座におけるローマ法文化への強い接近であり、公証人による文書実践を直接準備したとされる。

最後に、13世紀のカルチュレールは、新たな変容を蒙った。もはや網羅的・理念的な編産物であることをやめ、特定的一件書類のみから構成されるものすら現われる。他方で、「法

学的志向」が顕著で、10世紀の文書がゴート法への関心のもとに、新たに収集されたり、領民の法的地位規定をめぐって、過去の文書が学問的関心の対象とされる。

総括では、段階をおっての変容、ならびに類型の違いが整理される。11世紀においては、教会改革とインカストラメントの進行のさなかにあつて、頻発する紛争に対処するため、法的にも霊的にも教会財産を防衛する道具として編纂されたカルチュレールが、12世紀を通じて、実務的性格を強めていく様子が、修道院と司教座との対比を通じて<sup>12</sup>、描かれているのである。一言で言うなら、カルチュレールは、同時期に進行した諸制度の変容と構造化の鑑なのであるが、それは、単なる「現実の反映」ではない。守護聖人の霊性や空間表象<sup>13</sup>、アイデンティティや法秩序意識等の表象様式の集成でもあり、同時に、現実を把握し、変容させる武器でもあったのである。

### おわりに

受益者による、文書史料の体系的な転写からなる冊子と定義されるカルチュレールは、テキストの生成と受容についての真に特権的な対象と見なされるにいたっている。カルチュレールを中心にして、「前」テキスト、「間」テキスト、さらには「後」テキストすら議論することができるのである。モレルとシャスタンの仕事は、この史料類型が、単に「記憶の改竄」の問題系にとどめておくには惜しい広大な地平を有していることを教えてくれる。

他方、そこでは、個々の史料は、抽象的にとらえられるテキストのみならず、形式、さらには物的なモノとしても検討されねばならないが、その基盤となるのが、古書体学や古書冊学に代表される、古典的な史料学の体系的技術である。さらに、コンテキストにおける意味の読解に関しては、同時代のあらゆる要因が考察に含まれなければならないが、これは伝統的な中世史学者（メディエヴィスト）にこそふさわしい。西欧近代が生み出した伝統的な「文明の技法」は、新しい問題関心にこそ適合的であり、失効していたのは実証主義とは別のなにかなのではなからうか。

<sup>12</sup> この点については、さらに、CHASTANG, P., *Mémoire des moines et mémoire des chanoines: Réforme, production textuelle et référence au passé carolingien en Bas-Languedoc (XIe-XIIe siècles)*, dans *L'autorité du passé dans les sociétés médiévales*, éd. par J.-M. SANSTERRE, Rome, 2004, pp.177-202 も参照。

<sup>13</sup> この議論の背後には、彼の学位論文指導教授であつたブランの論文の影響が感じられる。BOURIN, M., *Délimitation des parcelle et perception de l'espace en Bas-Languedoc aux Xe et XIe siècles*, dans *Campagnes médiévales: l'homme et son espace. Etudes offertes à Robert Fossier*, éd. par E. MORNET, Paris, 1995, pp.73-85.

## Editions de textes et bibliographie sommaire

1. Editions (おおよそ 80 年代以降に刊行された教会文書集を中心に)

*Cartulaire de l'abbaye Saint-Sauveur de Redon*, Rennes, 1998.

BIENVENU, J.-M., FAVREAU, R. et PON, G., éd., *Grand cartulaire de Fontevraud = Pancarta et cartularium abbatissae et ordinis Fontis Ebraudi*, t. I, Poitiers, 2000.

BOUCHARD, C. B., éd., *The Cartulary of Flavigny*, Cambridge, Mass., 1991.

CHAUVIN, Y., éd., *Cartulaires de l'abbaye Saint-Serge et Saint-Bach d'Angers (XIe-XIIIe siècles)*, Angers, 1997.

FLAMMARION, H., éd., *Cartulaire du chapitre cathédral de Langres*, Turnhout, 2004.

FONTANEL, J., éd., *Le Cartulaire du chapitre cathédral de Coutances*, Saint-Lô, 2003.

FOREVILLE, R., éd., *Le cartulaire du chapitre cathédral Saint-Etienne d'Agde*, Paris, 1995.

FOSSIER, R., éd., *Cartulaire chronique du prieuré Saint-Georges d'Hesdin*, Paris, 1988.

GARRIGUES, M., éd., *Le premier cartulaire de l'abbaye cistercienne de Pontigny (XIIe - XIIIe siècles)*, Paris, 1981.

GERARD, P. et GERARD, T., éd., *Cartulaire de Saint-Sernin de Toulouse*, Toulouse, 1999.

GERZAGUET, J.-P., éd., *Les chartes de l'abbaye d'Anchin (1079-1201)*, Turnhout, 2005.

GUYOTJEANNIN, O., éd., *Le chartrier de l'abbaye prémontrée de Saint-Yved de Braine (1134-1250)*, Paris, 2000.

LEFEVRE, S. et FOSSIER, L., éd., *Recueil d'actes de Saint-Lazare de Paris, 1124-1254*, Paris, 2005.

MAGNOU-NORTIER, E., éd., *Recueil des chartes de l'abbaye de la Grasse*, t. I, Paris, 1996.

OURLIAC, P. et MAGNOU, A.-M., éd., *Cartulaire de l'abbaye de Lézat*, Paris, 1984/87, 2 vol.

OURLIAC, P. et MAGNOU, A.-M., éd., *Le cartulaire de la Selve: la terre, les hommes et le pouvoir en Rouergue au XIIe siècle*, Paris, 1985.

PAILHES, C., éd., *Recueil des chartes de l'abbaye de la Grasse*, t. II, Paris, 2000.

PIPPON, B., éd., *Le chartrier de l'abbaye-aux-Bois (1202-1341)*, Paris, 1996.

PONS, G. et CABANOT, J., éd., *Cartulaire de la cathédrale de Dax: Liber reveus (XIe - XIIIe siècles)*, Dax, 2004.

RAVIER, X. et CURSENTE, B., éd., *Le cartulaire de Bigorre (XIe - XIIIe siècles)*, Paris, 2005.

ROUET, D., éd., *Le cartulaire de l'abbaye bénédictine de Saint-Pierre-de-Préaux (1034-1227)*, Paris, 2005.

TERROINE, A. et FOSSIER, L., éd., *Chartes et documents de l'Abbaye de Saint-Magloire, t. II. 1280 à 1330*, Paris, 1966.

TERROINE, A. et FOSSIER, L., éd., *Chartes et documents de l'Abbaye de Saint-Magloire, t. III. 1330 - début du XVIe siècle*, Paris, 1976.



TERROINE, A. et FOSSIER, L., éd., *Chartes et documents de l'Abbaye de Saint-Magloire, t. I. Fin du Xe siècle - 1280*, Paris, 1998.

WAQUET, J., ROGER, J.-M. et VEYSSIERE, L., éd., *Recueil des chartes de l'abbaye de Clairvaux au XIIIe siècle*, Paris, 2004.

## 2. Bibliographie sommaire

ARNOUX, M., Disparition ou conservation des sources et abandon de l'acte écrit : quelques observations sur les actes de Jumièges, dans *Tabularia «Etudes»*, 1, 2001, pp.1-10.

ATSMA, H. et VEZIN, J., Les responsables de la transcription des actes juridiques et le services de l'écriture au Xe siècle: l'exemple de Cluny, dans *Le statut du scribe au Moyen Age. Actes du XIIIe colloque scientifique du Comité international de paléographie latine (Cluny, 17-20 juillet 1998)*, éd. par M.-C. HUBERT, E. POULLE et M. H. SMITH, Paris, 2000, pp.9-20.

ATSMA, H. et VEZIN, J., Gestion de la mémoire à l'époque de Saint Hugues (1049-1109): la genèse paléographique et codicologique du plus ancien cartulaire de l'abbaye de Cluny, dans *Histoire et archives*, 7, 2000, pp.5-29.

BALDWIN, J. W., Etienne de Gallardon and the Making of the Cartulary of Bourges, dans *Viator*, 31, 2000, pp.121-146.

BERTRAND, P., Cartulaires et recueils d'actes: aux avant-postes d'une «nouvelle diplomatique» (espace français, XIe-XIIIe s.), dans *Revue Mabillon*, n.s. 17, 2006, pp.261-267.

BRUEL, A., Note sur la transcription des actes privés dans les cartulaires antérieurement au XIIIe siècle, dans *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, 36, 1875, pp.445-456.

CHASTANG, P., *Lire, écrire, transcrire. Le travail des rédacteurs de cartulaires en Bas-Languedoc (XIe-XIIIe siècles)*, Paris, 2001.

CHASTANG, P., Cartulaires, cartularisation et scripturalité médiévale: la structuration d'un nouveau champ de recherche, dans *Cahiers de civilisation médiévale*, 49, 2006, pp.21-32.

DAVIES, W., Forgery in the Cartulaire de Redon, dans *Fälschungen im Mittelalter. Internationaler Kongress der Monumenta Germaniae Historica, München, 16.-19. September 1986, Teil IV. Diplomatische Fälschungen (II)*, Hannover, 1988, pp.265-274.

DAVIES, W., The Composition of the Redon Cartulary, dans *Francia*, 17/1, 1990, pp.69-90.

DECLERCQ, G., Le classement des chartiers ecclésiastiques en Flandre au Moyen Age, dans *Scriptorium (Actes du XIe Colloque du comité international de paléographie latine, 1995)*, 50, 1996, pp.331-344.

DECLERCQ, G., Originals and Cartularies: The Organization of Archival Memory (Ninth Eleventh Century), dans *Charters and the Uses of the Written Word in Medieval Society*, ed. by K. HEIDECKER, Turnhout, 2000, pp.147-170.

- DEFLOU-LECA, N., L'élaboration d'un cartulaire au XIIIe siècle: le cas de Saint-Germain d'Auxerre, dans *Revue Mabillon*, n.s. 8 (=69), 1997, pp.183-207.
- DELAUME-BOUTET, L., Le chartrier de l'évêché de Limoges, cotation et inventaires, dans *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, 152, 1994, pp.159-203.
- FLAMMARION, H., Une équipe de scribes au travail au XIIIe siècle: Le grand cartulaire du chapitre cathédral de Langres, dans *Archiv für Diplomatik*, 28, 1982, pp.271-305.
- GEARY, P. J., *Phantoms of Remembrance. Memory and oblivion at the End of the First Millennium*, Princeton, 1994.
- GENET, J.-P., Cartulaires, registres et histoire: l'exemple anglais, dans *Le métier d'historien au Moyen Age. Etudes sur l'historiographie médiévale*, éd. par B. GUENEE, Paris, 1977, pp.95-138.
- GUYOTJEANNIN, O., MORELLE, L. et PARISSÉ, M., éd., *Les cartulaires. Actes de la Table ronde organisée par l'Ecole nationale des chartes et le G.D.R. 121 du C.N.R.S., Paris, 5-7 décembre 1991*, Paris, 1993.
- GUYOTJEANNIN, O., Les méthodes de travail des archivistes du roi de France (XIIIe - début XVIe siècle), dans *Archiv für Diplomatik*, 42, 1996, pp.295-373.
- GUYOTJEANNIN, O., Super omnes thesauros rerum temporalium: les fonctions du Trésor des chartes du roi de France (XIVe-XVe siècles), dans *Ecrit et pouvoir dans les chancelleries médiévales: espace français, espace anglais. Actes du colloque international de Montréal, 7-9 septembre 1995*, éd. par K. FIANU et D. J. GUTH, Louvain-la-Neuve, 1997, pp.109-132.
- GUYOTJEANNIN, O., «Penuria scriptorum». Le mythe de l'anarchie documentaire dans la France du Nord (Xe-première moitié du XIe siècle), dans *Pratiques de l'écrit documentaire au XIe siècle (t. 155 de Bibliothèque de l'Ecole des Chartes, 1997)*, 1997, pp.11-44.
- GUYOTJEANNIN, O., La science des archives à Saint-Denis (fin du XIIIe - début du XVIe siècle), dans *Saint-Denis et la royauté. Etudes offertes à Bernard Guenée*, éd. par F. AUTRAND, C. GAUBARD et J.-M. MOEGLIN, Paris, 1999, pp.339-353.
- GUYOTJEANNIN, O., La tradition de l'ombre: les actes sous le regard des archivistes médiévaux (Saint-Denis, XIIe-XVe siècle), dans *Charters, Cartularies, and Archives: The Preservation and Transmission of Documents in the Medieval West*, ed. by A. J. KOSTO and A. WINROTH, Toronto, 2002, pp.81-112.
- GUYOTJEANNIN, O. et MORELLE, L., Tradition et réception de l'acte médiéval: Jalons pour un bilan des recherches, dans *Archiv für Diplomatik*, 53, 2007, pp.367-403.
- HIGOUNET-NADAL, A., La pratique des courroies nouées aux XIe et XIIe siècles d'après le Grand Cartulaire de la Sauve Majeure, dans *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, 158, 2000, pp.273-282.
- HILLEBRANDT, M., Les cartulaires de l'abbaye de Cluny, dans *Mémoires de la Société pour l'histoire du droit et des institutions des anciens pays bourguignons, comtois et romans*, 50, 1993, pp.7-18.

- HUNDSON, J., L'écrit, les archives et le droit en Angleterre (IXe - XIIe siècle), dans *Revue historique*, CCCXV/1 (637), 2006, pp.3-35.
- KOSTO, A. J. and WINROTH, A., ed., *Charters, Cartularies, and Archives: The Preservation and Transmission of Documents in the Medieval West. Proceedings of a Colloquium of the Commission Internationale de Diplomatique (Princeton and New York, 16-18 September 1999)*, Toronto, 2002.
- LE BLEVEC, D., éd., *Les cartulaires méridionaux. Actes du colloque organisé à Béziers les 20 et 21 septembre 2002 par le Centre historique de recherches et d'études médiévales sur la Méditerranée occidentale (E.A. 3764, Université Paul-Valéry - Montpellier III)*, Paris, 2006.
- MATTEONI, O., La conservation et le classement des archives dans les chambres des comptes de la principauté bourbonnaise à la fin du Moyen Age, dans *La France des principautés, les Chambres des comptes, XIVe et XVe siècles, actes du colloque de Moulins, 6-8 avril 1995*, éd. par P. CONTAMINE et O. MATTEONI, Paris, 1996, pp.65-81.
- MAXWELL, R. A., Sealing Signs and the Art of Transcribing in the Vierzon Cartulary, dans *The Art Bulletin*, 81-4, 1999, pp.576-597.
- MORELLE, L., De l'original à la copie: remarques sur l'évaluation des transcriptions dans les cartulaires médiévaux, dans *Les cartulaires. Actes de la Table ronde organisée par l'Ecole nationale des chartes et le G.D.R. 121 du C.N.R.S., Paris, 5-7 décembre 1991*, Paris, 1993, pp.91-104.
- MORELLE, L., Les chartes dans la gestion des conflits (France du Nord, XIe-début XIIe siècle), dans *Pratiques de l'écrit documentaire au XIe siècle (t. 155 de Bibliothèque de l'Ecole des Chartes, 1997)*, 1997, pp.267-298.
- MORELLE, L., Histoire et archives vers l'an mil: Une nouvelle «mutation»? , dans *Histoire et archives*, 3, 1998, pp.119-141.
- MORELLE, L., Des moines face à leur chartrier: étude sur le premier cartulaire de Montier-en-Der (vers 1127), dans *Les moines du Der (673-1790). Actes du colloque international d'histoire (Joinville, Montier-en-Der, 1er-3 octobre 1998)*, éd. par P. CORBET, Langres, 2000, pp.211-258.
- MORELLE, L., The Metamorphosis of Three Monastic Charter Collections in the Eleventh Century (Saint-Amand, Saint-Riquier, Montier-en-Der), dans *Charters and the Use of the Written Word in Medieval Society*, ed. by K. HEIDECKER, Turnhout, 2000, pp.171-204.
- MORELLE, L., Suger et les archives: en relisant deux passages du *De administratione*, dans *Suger en question: regards croisés sur Saint-Denis*, éd. par R. GROSSE, München, 2004, pp.117-139.
- MORELLE, L., Cacographie et calligraphie: à propos d'une faute de lecture commise par un cartulariste du XIIIe siècle en copiant un original disparu de Charles le Chauve pour Saint-Germain d'Auxerre (Tessier, no 262), dans *Auctoritas. Mélanges offerts au professeur Olivier Guillot.*, éd. par G. CONSTABLE et M. ROUCHE, Paris, 2006, pp.333-343.
- NOIZET, H., La transmission de la documentation diplomatique de Saint-Martin de Tours antérieur à 1150, dans *Histoire et Archives*, 17, 2005, pp.7-36.

- OURLIAC, P., Trois cartulaires méridionaux, dans *Revue historique du droit français et étranger*, 75, 1997, pp.261-273.
- PARISSE, M., Remarques sur le cartulaire de Gorze du XIIe siècle, dans *Bulletin de la Société nationale des antiquaires de France*, 1991, pp.93-94.
- PARISSE, M., PEGEOT, P. et TOCK, B.-M., éd., *Pancartes monastiques des XIe et XIIe siècles. Table ronde organisée par l'ARTEM, 6 et 7 juillet 1994*, Nancy, Turnhout, 1998.
- POULLE, E., Classement et cotation des chartriers au Moyen Age, dans *Scriptorium (Actes du XIe Colloque du comité international de paléographie latine, Bruxelles, Bibliothèque royale Albert Ier, 19-21 octobre, 1995: La conservation des manuscrits et des archives au Moyen Age)*, 50, 1996, pp.345-355.
- PLATELLE, H., Le premier cartulaire de l'abbaye de Saint-Amand, dans *Le Moyen Age*, 62, 1956, pp.301-329.
- RICHARD, J., Les archives et les archivistes des ducs de Bourgogne dans le ressort de la Chambre des comptes de Dijon, dans *Bibliothèque de l'Ecole des chartes*, 105, 1944, pp.123-169.
- ROUCHE, M., Les survivances antiques dans trois cartulaires du Sud-Ouest de la France aux Xe et XIe siècle, dans *Cahiers de Civilisation médiévale*, 23, 1980, pp.93-108.
- SENSEBY, C., Une notice fautive du cartulaire de l'abbaye tourangelle de Noyers, dans *Pratiques de l'écrit documentaire au XIe siècle (t. 155 de Bibliothèque de l'Ecole des Chartes, 1997)*, 1997, pp.61-94.
- STIENNON, J., Considérations générales sur la bibliothéconomie et l'archivistique médiévales, dans *Scriptorium (XIe Colloque du comité international de paléographie latine, Bruxelles, Bibliothèque royale Albert Ier, 19-21 octobre, 1995: La conservation des manuscrits et des archives au Moyen Age)*, 50, 1996, pp.229-238.
- ZERNER, M., Cartulaire et historiographie à l'époque grégorienne: le cas de Saint-Victor de Marseille, dans *Provence historique = J.-P. Boyer et F.-X. Emmanuelli (sous la direction de), De Provence et d'ailleurs. Mélanges offerts à Noël Coulet*, 49, 1999, pp.523-539.